

池端雪浦 編

『変わる東南アジア史像』

山川出版社 1994年 331頁+25

八尾 隆生

本書は「あとがき」にある様に、この四半世紀の間に著しく発展をとげてきた東南アジア史研究の総合化をめざして、研究・教育の一線に立つ研究者が集まって纏めたものである。その際、研究者の関心を集めている問題をすべて取り上げる事は出来ないが、入門書足りえるようバランスをとる事、他分野の人に研究の現状を広く理解出来るようにする事が念頭にあったとされる。早速内容に入ろう。

序章「新しい東南アジア史像を求めて」には池端雪浦「東南アジア史へのアプローチ」と桜井由躬雄「東南アジアの生態的枠組み」の2本を収める。

池端論文は東南アジア史研究の歩みを概観し、問題とすべき「自律史」「インド化」「港市国家論」「ネットワーク論」「王朝史的研究」「植民地支配の実情と現地側の変革運動」等の議論の歴史を手際よく纏めており、この後の諸論文もこれに沿って論が展開される形式をとっている。

桜井論文は東南アジアの生態を概説書風に纏めたものだが、入門者や他分野の人がこれを読んで東南アジアの枠組みをイメージするには不親切である。折り込みにしてもまともな地図を挿入すべきである。

第1章「借り着の王権」には深見純生「シュリーヴィジャヤ帝国」、石井和子「ジャワの王権」、奥平龍二「上座仏教国家」を収める。

深見論文はシュリーヴィジャヤの歴史を漢籍及び現地・インドの刻文史料で再構成する。石井論文はポロブドゥール建築と密教經典との関係分析を基にジャワにおける普遍的真理の形成を論じる。奥平論文はビルマのヒンドゥー、上座仏教の受容過程を述べる。

初期東南アジア王権成立の際に取入れられた外文明を「借り着」と称している訳である。外文明との関係に関する議論に新しい見解を披露したものであるが、「借り着」を着ている裸体の東南アジアの諸王権の姿が見えてこないと感じるのは評者だけであろうか。そう感じる最大の原因は、それを扱うであろう考古学者による専論がこの書にないためである。

第2章「ネットワークの中で」には、桃木至朗「ベトナムの『中国化』」、石井米雄

「タイの中世国家像」、鈴木恒之「港市国家パレンバン」を収める。

桃木論文はベトナムを理解する枠組みについて述べ、中国文化圏と東南アジア文化圏の間でゆれる研究上の問題点が指摘される。石井は核心域の港市国家「アユタヤ」を、鈴木は後発の港市国家「パレンバン」を扱う。石井はかつて桜井と共同で執筆した『東南アジア世界の形成』（講談社、1985年）で「ヌガラ論」を提起したが、その事にどうして触れないのか。「ヌガラ論」を両氏が撤回した事は学界内では了解事項とされているが、前著及び本書がより広範な読者を前提としている限り、きちんと説明する義務はあろう。

第3章「自己主張する地方」には斎藤照子「コンバウン朝下の流動する地方社会」と小泉順子「バンコク朝と東北地方」を収める。いずれも新たな史料の搜索とその分析に基づいて中央の文書による通説に挑戦したものである。前近代東南アジア史研究においてもようやくこうした地方文書を研究に利用できる様になり、こうした研究の蓄積によって東南アジア史像がどんどん書き替えられてゆく無限の可能性がある。

第4章「新しい契約」は大橋厚子「強制栽培制度」と高田洋子「メコンデルタの開発」を収める。大橋論文では植民地政権下の現地農民がひたすら惨めな境遇に甘んじていたというステレオタイプ的見方を見直す必要がある事、しかも個別の実証作業に埋没するのではなく世界レベルで見直す必要が強調される。高田論文は植民地政権がベトナム人の自生的発展の芽をすべて摘んでしまったという通説に反論し、結局はフランス人によってベトナムの「南進」が完成した事、その下でベトナム人大地主階級が発生した事を論じ、植民地政権と現地の人々の関係を、単純に対立するものとして見做す事の安直さを指摘する。

第5章「変革への挑戦」は弘末雅志「インドネシアの民衆宗教と反植民地主義」、伊東利勝「ビルマ農民の意識変化」、池端雪浦「フィリピン国民国家の創出」を収める。各論文は反植民地運動が、表面的には単なる伝統への復帰を求めように見えながら、実は当の植民地権力側が現地に持ち込んだ理念なり思想なりを自らの側に取り込む形で進行した事を明らかにする。弘末論文はキリスト教とシ・シンガ・マンガ・ラジャ信仰との関係、伊東論文は西洋的な諸概念と伝統的思考とが共存する様、池端論文はフィリピン革命における民衆結合の鍵としてのカトリシズムについて論ずる。

ざっと全体を見たが、前近代史を専門とする者として一点だけ付言させていただく。伊東論文が述べる様に外文明の「つまみぐい」は東南アジアだけに特に見られる訳ではない以上、それを東南アジアの特質と論じる事はナンセンスではないかという指摘について。基本的に評者は氏の意見に賛成する。外世界との接触、文化の吸収は極

めてあたり前の事で、「自律史観」とその事は決して矛盾はしないはずである。しかし、そうした外文明の受容を認めた上で、それならば何故東南アジアは今に至るまで、逆に外世界に十分影響を与えるほどの高度な自己の文化を生み出す事が出来なかったのかという事も真剣に問われなければならない。さらに文化の発展がある程度の凝集力を前提とするものならば、そもそも東南アジアを一つのものとして括る考え方が本当に正しいのかという根本的な問題に立ち返る必要もあろう。このような点にまだまだ拘らなければならない段階にあるのが東南アジア史研究であり、本書にも善かれ悪しかれその事が反映されているのである。まずは御一読を。

(連絡先：大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1 大阪外国語大学地域文化学科 TEL 0727-30-5282)